

語り手

熊渕 くまぶち

博康 ひろやす

さん



八代サイクル

姫路市南八代町

売った以上、
責任を持ってちゃんとしてあげなあかんからな。

生年月日は昭和十五年三月三十日。佐用郡佐用町下石いうところで生まれました。私は次男。兄弟は長女、次女、三女、長男、次男、三男の六人。

佐用にいたのは、新制中学を卒業する十五歳までです。昔はね、親がたいへんやから食い扶持を減らすゆうて、生活のために働きに行かせとったわけ。その時分は、高校に行くか、就職するか。私ら四十何人おって、高校行ったのは三分の一ぐらいかな。昭和三十年の三月十五日に卒業して、三月十六日に姫路市の自転車屋へ住み込み店員に出した。

親父が佐用で、鍛冶職と自転車屋と両方しとったわけ。問屋さんが回ってきよって、問屋さんの社長が「立派な自転車屋さんがおってやから、そこへ入ればまともな人間に育つ」と。それで姫路の自転車屋へ入った。

自転車屋は豆腐町（とふまち）にあった。今、西駅前町ゆうけど、姫新線のホーム際にあった阿保病院の筋向えでね。青田いう自転車屋。昭和三十年。おやっさん夫婦と三人やな。息子はおったけれども他へ働きに行きよったかな。

最初にさせてもらった仕事は拭き掃除。それと車輪のリムを、スポーク一本のバラバラから組み立てるわけや。リムを組み上げるのに、歪み三年いうて言葉があるように、三年経たないとおやっさんは弟子に教えなんだんや。見て習えと。そういう時代やったんや昔は。

自転車の部品を店の二階に置いてあって、戸を開けて、つるべみたいなんで下に下ろしよった。私が就職して間がない頃にね、リムを下ろすときに、二階から下の作業場へ落としたんや。当時ね、おやっさんのことを大将っていいよった。真下に大将がおって、大将



修理で使う道具類。使うのは、道具よりも口の方が多いらしく「だいたい口で商売できる」と熊淵さん。

の頭にボンってリムがまともに当たった。ビックリして「大将すいません」って飛んで下りて謝って。ほな、ニコニコしてやで「いや、かめへんかめへん、大丈夫や。ひろちゃんがな、落とした真下におったわしにも責任があるんや。そんな謝らんでもええ。大丈夫や」いうてはってな。おやっさんは、噂で立派な人やって聞いたけれども、さすがやなどわしは思っ。それから大将に頭が上がりへん。

わしの後に同僚が住み込みで入ってきたわけ。同僚同士でけんかした。ほんなら大将に「同じ屋根の下で生活するもん同士がな、けんかするようでは、まともな人間にならへん。けんかなんかしたらあかん」ってごっつい怒られてね。それからけんかはせん。

立派なおやっさんに育てられて、私はそこへ十八年務めた。今も、青田自転車さんはあるよ。高尾町の大將軍のところ。三十八年やったかな。モノレールが付くんで、豆腐町が立ち退きになって移転したわけ。継いだ息子さんと今も兄弟以上に仲良うやっとするで。

結婚は四十三年。岡田の方の安ものアパートを借りて、二人で住んどった。

青田自転車さんから独立した時期、自転車が売れへん時代になってきたんや。わしの給料も払えんさかいに、どこか独立するかと話があつて。わしも迷惑かけてまでおりたくないし、ええ頃や思っ。青田自転車さんをやめるとき、他で勤めるとか、他の仕事は思わんかったね。特技やないけれども、これしかないと思っ。四十八年七月に店舗を借りて、南八代町へ来たわけ。

ここは、貸店舗を建てよる途中やった。場所的にこの辺はちょうど自転車屋がないから、一発で決めた。家賃は当時から五万なんぼやった。えらかったで。

開店した頃は、お客さんがあらへん。開店して二、三カ月は知り合いや友達がちよこちよこ来て、ちよっと売れるんや。それがストンと止まる。止まったときに生活が。家賃かせがんなんし、長男が二歳。



誰からの頂き物なのか分からなくなってしまうが、とにかく開店以来ずっと飾っているモナリザの絵。夫婦二人三脚の人生を静かに見守ってきた。

熊淵さんと妻の勢伊子（せいこ）さん。勢伊子さんは熊淵さんがガンで入院した時、看病のため病院に通いつつ、店をひとりで一ヶ月間営業した。



昔は問屋さんがバラ組いうて、スポークからみな自転車を組みよったわけ。その組賃、一台二百円。一台組むのに二時間かかる。店で仕事をしながら十時頃まで組み立てしよった。それを家賃の足しにした。嫁はんがカタログを、ポストインして回った。そないして必死のパッチでやってきた。

四十九年にオイルショックがあつたんや。あの時も苦労したな。問屋のある人に「商品が入ってこんようになるから倉庫でも借りて買い込んでけ」といわれた。蓄えとかなんだら成り立たへん。「資金もないしよせん、どないしたらええんや」いうたら、問屋のセールスに「店やめてまえ」っていわれた。わしはこの店の範囲で、無理せんようにマイペースでやった。収入的に安定するまでに五年ぐらいかかった。今なつたらな、思い出や。

ここに住んどって、子ども三人育てたんや。危ないから、事務所の机とひもでくくって、息子が出んようにつないで。通りよう人が「いや、かわいそうなことする。犬みたいにしてってやない」って（笑）。その後双子、女の子二人が生まれて、その子かて、自転車の部品の段ボールに入れて遊ばせとって、お客さんが笑いよったけれども。その子の子、孫が今大学に行きよるんやでな。

五年前に病氣して、胃ガンと食道ガンで全摘。助かってやね、現在やつとるわけ。

電動の事故が多い。またがってから、後方を確認していかなあかんわけや。けんけん乗りって、けんけんをしながらパッと乗る人が昔の人は多い。けんけんに乗ったらアシストするからシュツと出るんや。ほんで転んでケガが多い。

八十歳を超えたお客さんは断らせてもらつてる。家族に保護者、息子、娘、嫁、誰かが買つてもええゆうてやつたら売るけどな。一人やつたらよう売らん。「売ってくれへん」と、怒つてのがあるけれども。乗つたらケガするかやね、止めた場所がわからんようになる人が多い。みな保険に入つてますけどもやね、事故したら、保険に入ろうとどうないしよ



現在の外観。創業当初と比べて大きく変わったのは、歩道ができたことと、看板がないこと。看板は老朽化で一つが落ちてしまい、危ないので全部外した。

うとマイナスやからね。わしはな、本人さんのことを思っているんや。ただ売るだけではだめ。

バイクは整備の免許も取っとるしやね、売りよったんや。けど店狭いし、やっぱり両方は難しいしな。電動でもわしはパナソニックしか扱えへん。ヤマハもブリジストンも問屋さん売ってくれいいうで。わしところは売らへん。パナソニックだけやったら、どこが痛む、どこが悪いって、クレームも出てくるし、一つのを触っとたら全部わかるわけや。メーカーが違うと作り方が違う。あれやこれやしよったら、ややこしい。共通で使える部品が少ないから、部品が合わへんし。

売った以上、責任を持ってちゃんとしてあげなあかんからな。お客さんに迷惑がかかるいうことは、いかんさかいに。自分も困るわけや。自分が困らんように、自分の手に合うた仕事だけをやってる。年がいったらなおさらですわ。走り回られへんからね。だから、自分の手に合はんことは、あそこやったら上手にしてやと、紹介するんが立派なんや。自分の年と力を考えて、商いをせんとね。

自転車はバイクに比べたら、そりゃ簡単や。見る範囲がしれとるし、長年でわかっとうさかい。軽いし、死ぬまでできる。みないうてや「定年が無いでええな」いうて。あと、一年もつか、三年もつかわからんけども、動ける間はね、自分のリハビリで仕事しよんや。嫁はんと二人で、お迎えが来るまで助けおうていかなしうがないな。



姫路市からの技能功労表彰や、自転車安全指導員など自転車にまつわる地域貢献への感謝状などが、壁にびっしりと飾られている。

聞き手

戸田 真由美 さん

加古川市生まれ、明石市在住。震災後のまちづくりや防災に取り組む「認定NPO法人まち・コミュニケーション」(神戸市長田区)のスタッフ。

聞き書きを実践して学んだのは、話し言葉の持つ微妙なニュアンスを文字で表現することの難しさや、聞き書きの手法を通じて他人の人生に触れられるおもしろさ。